

2007 年秋に開場した「あうるすぽっと」でのアートマネジメント研修生プログラム。その3年目が終わろうとしています。インターンの意味を考えるとともに、また、2009年6月から2010年2月までの9ヶ月間を第3期生たちとともに振り返ってみたいと思います。

「インターンシップ」で学ばせよの 中山 夏織

豊島区文化政策懇話会の委員を経て、あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）の開場準備に、アドヴァイザーとして関わっていた二〇〇七年二月、ふいと思い浮かんだのが、公共劇場の開場を体験するアートマネジメントのインターンシップの実現可能性である。

多くの施設や芸術団体で、アートマネジメントや技術スタッフをめざす若い世代のためのインターン制度は広がりをみせ、インターンの経験を単位として認める大学も増えた。インターンを受け入れるのは、いわば確立した、それなりに教える余裕と自負のある組織であるだろう。開場準備で混沌状態のあうるすぽっとにそれが可能だろうか？ 劇場が生まれるという一度きりの稀有な機会を体験すること自体が、最も優れた人材育成の機会になりうるのではないか…。

劇場スタッフの英断もあって、「あうるすぽっと」アートマネジメント研修生プログラム」が幕を開け、そして、いま、「開場」という緊張感こそ過去のものとなったが、三年目のプログラムが終了しようとしている。

公共劇場という場は、おそらく他の会社でのインターンとは異なる体験を与えられる。あれもこれもと、仕事が多岐にわたるからである。また、評価基準が単なる利益ではないし、出会い、交渉しなければならぬステークホルダーも幅広い。内部調整の困難さを考えると、これほど厄介な組織はないというおまけ付きでもある。だが、それこそが、公共劇場が提供するインターンの醍醐味なのだと考えている。

一人一人の研修生が、実際、どれだけものを見、どれだ

けのものを学んだのかは、本音を言えば、わからない。研修生たちに安易さというのか、準備不足を感じとるからだ。

悩むのは、インターンのような学ぶ機会を与えることの功罪である。教えてもらうことが、与えられることが当然のように考えてしまう。与えられたものでは、自ら獲得したものと同じ深みもちえない。また、現場にとって便利な存在としての雑用係を提供しているだけではないかと思いつくことも少なくない。

三年という時間のなかで見えてきたものは、芸術をめざす若い世代の「現在」である。自分の思いには忠実だが、思いを叶えるセルフ・マネジメントには欠く（思いの強さゆえにアップアップしている）、調整やチーム作業に慣れていない、曖昧な状況に対応できない、個々の事象をつないで考えられない、異なる見解に出会うと思考停止状態に陥る、等等などである。驚くのは、かなり頑固だということ、また、思いのほか、物忘れが多いということである。

これらにいかに対処していくのか。もちろん、こちらの思いが届かないのは、伝え方が悪いのかもしれない。わかる仕掛けが必要なのか。環境が激変しているにもかかわらず、旧態依然とした業界の価値やルール、自分のやり方を教え込むうとしていただけじゃないかとも思えない。インターン体験で、かえって視野が狭くなってしまいうようであれば、私たちの罪は重い。多様な視点、多様な未来を、どのようにに内包させるかは、私たちにとっての最大の課題である。

（なかやまかおり／プロデューサー）

あつるまほしとアートマネジメント研修生レポート

がむらしゅに挑んだ九ヶ月

吉田 衣里

九ヶ月に及ぶインターン生活が終わろうとしている。思えば(という過去のことのように)現在進行形の状況でもある)、とても楽しくやりがいがあった。大変忙しく、非常に苦しい九ヶ月であった。

私は将来、アジアの演劇やミュージカル、コンサートなどを招聘する仕事がしたいと考えている。高校生の頃から始まった、結構な長期計画であり、大学進学の際には、この夢を叶えるために舞台芸術を専攻するか、語学を専攻するかで相当に迷った。結局、語学という側面から固めていくことにし、中国語と韓国語を学ぶ程度の外枠を固めた私は、次ほどの方向に進むかを思案していた。そこでたまたま見つけたのが、このアートマネジメント研修だったのである。

アートマネジメントとは何だろう、劇場の仕事とは何だろう、という根本的な疑問を抱えずの素人(そのうえ学生)は、この九ヶ月を通して多くのことを学んだ。社会人としてのマナー、ルールから始まり、劇場に関する諸々の雑用、広報の仕方や税制、著作権、ワークショップに関する様々な仕事であったり、舞台で作品が公開されるまでの過程、そしてワークショップとは何か、演劇とは何かと言った、制作者それぞれに一本通った筋のようなものなどであった。

後先考えず舞台の世界に飛び込んだ私は、目下の目標を『仕事の出来る人になる』に定め、その都度とにかくがむしやりに挑んできた。このように九ヶ月を通してた

くさんのことを垣間見てきたが、中でも特に身に染みたことが二つある。

一つ目は、チームワークである。私は、元来こだわりの強いタイプで、自分が始めたことは自分のやり方に沿って終わらせたい、と考える。しかし実際に現場に立つて仕事をしてみたら、協力しなければ終わらない、自分一人では終わらせられないということがたくさんあった。また、人には向き不向きと言うものもある。苦手なことに挑戦することも大切だが、チーム内で分担し、皆で進める、というのも良い方法なのだと学ぶことを学んだ。押し所と引き所を弁えるとも言えるのだろうか。もちろん人に任せる前に自分も全力を尽くす、ということが大前提ではある。私は、インターン生がつけている日報を見るのが楽しみだった。前の人の仕事ぶりを見れば闘志が燃えるし、私が残した課題が片付いていたら、本当に有り難い気持ちでいっぱいになった。一人じゃないということ、九ヶ月を乗り越える活力の源であった。

二つ目は、人生は長い、ということだ。

外部講師を招いてのセミナーを何度も設けていたのだが、講師の方々の経歴に驚かされることもしばしばだった。日本的な終身雇用体制の影響だろうか。何か、今就職したらもう一生職を変えることはできない、と漠然と考えていた私にとっては、講師の方々の経歴に目の覚める思いをしたし、年齢を重ねることが楽し

みに思えてきた。

今の私にとって、十年後は未知である。ましてや二十年後、三十年後なんて想像もつかない。しかし、そこにあるのは不安だけではないということが分かった。また、自分が諦めずにいれば、願いは叶うということも。回り道は決して無駄足ではない、ということが分かったことは大きな収穫であった。

本当に、長く苦しい九ヶ月であった。学業と両立を図るべく、気も狂わんばかりの日々を過ごした。また、自分のやりたいことをする時間、自分の時間が取れず、いらした日も少なくなかった。しかし、同時に、非常に満ち足りた、得難い九ヶ月であった。何よりも、楽しかった。ただ言われたことをこなすだけのアルバイトとは違い、自分の頭を使って仕事をするのがとても楽しかった。また、お客様の笑顔に直結している、人の心に何かを残すことができる、という所も感慨深く、嬉しかった。

きっとこの仕事をしたという経験は、どこに行っても役に立つだろう。だけど、私はできることならば、舞台の方面でこの経験を生かしたい。私の夢を叶える糧にしたいと考えている。このような素晴らしい機会を与えてくださった中山先生、劇場の方々には感謝しても足りない。また、ともに研修を受けたインターン生にも感謝の言葉しか出てこない。十年後、二十年後、この仲間たちとも一緒に仕事をするようになったら…。それはとても愉快で幸せな想像である。まだまだ先は見えないが、これからもいつも諦めずに前進していきたい。

(よしだえり/日本大学大学院
文学研究科中国学専攻在学中)

ワークショップの魅力

廣瀬 麻姫

研修があと一カ月になった現在、振り返ってみると、アートマネジメント研修に参加してから学生生活がとても忙しくなり、しかしとても密度の濃い時間を過ごすことができたと思っている。元々、芸術に触れる機会が少なかつた私の学生生活のなかで、芸術のわくわくさせる不思議な感覚に出会ったこと、そして、劇場とは具体的にどのような仕事をしているのだろうと興味を持ったことが、アートマネジメント研修に参加しようと思ったきっかけであった。

実際に、劇場のスタッフとして働いてみると、今まで見ることがなかった裏から芸術を支える仕事というものがあるというものであるのかを少しずつ感じることができた。研修初期の頃は、ワークショップのチラシを掲示版に貼りに行ったり、ワークショップへの応募者のリストを作成する作業が多く、思っていた以上に地道な作業が多いと感じた。

しかし、ワークショップの応募者の集計をしていると、応募はがきやファックスなどに応募者のワークショップへの思いが書いてあり、ひとつのワークショップが応募者それぞれにとって特別な存在であるというのに気づかされた。ひとつのワークショップに色々な思いを抱いてやってくる参加者がいるということを知り、ひとつひとつのワークショップを大切にしていこうという思いが強まった。

そして、研修プログラムのなかで、ワークショップを初めて体験したことが私個人としても、とても大きな収穫であったように感じている。

特に、今までに経験のないダンスや演劇のワークショップに参加したことや、見学することでも大きな衝撃を受けた。そもそもワークショップというものに馴染みがなかったため、見るものすべてが新鮮で日々わくわくしていた。研修を通してワークショップの面白さを知ることができ、普段の大学生活のなかでは知り得なかったことを、たくさんワークショップから学ぶことができた。特に、表現することの大切さを改めて実感したことが大きかった。普段の生活で自分の思いを体で表現する機会はありません。そして、実生活には、必要ないと言え、必要がないからだ。

しかし、表現することは無駄なことではないと感じる瞬間をたくさん今までの研修で感じることもできたような気がしている。近年の日本人はコミュニケーション不足だと言われていることが多いが、ダンスや演劇のワークショップを見てみるとそのことをすっかり忘れてしまうほどに参加者同士が自然に打ち解けていた様子に驚いた。携帯電話やパソコンなどのツールが現代のコミュニケーションの主軸になってきているが、まだまだ人間は人と人が直接触れあうアナログなコミュニケーションの仕方を忘れたわけではないのだとわかった。

だとわかった。

現在、希薄になりがちである、人と人が同じ時間と空間を共有することを、ダンスや演劇のワークショップは上手く引き出す役割を果たしていた。人と人が直接関わり合いながら何かを表現していくことを通し、現代人に足りないコミュニケーションが培うことができる。そのワークショップ事業に研修生として関わっていくことは、とても実りあるものだったと思う。

ワークショップに関して、研修初期にはチラシ貼りやインターネットへの書き込み、応募者の集計や、当日の準備、ワークショップ終了後の集計などの事務作業をし、裏側での地道な作業があつてはじめて事業が成り立っていることを知った。

そして、秋になって、企画段階から全部に携わるといふ研修生にとっては重大なプロジェクトを担う事になった。ここでは今までのワークショップとは比較にならないほど、苦悩した。それまでにいくつものワークショップ事業に携わってきたにもかかわらず、見ていたように気づいていなかった様々な盲点に衝突した。まずワークショップの制作では、アーティスト側の特徴を理解し、どのような内容にしていこうかを提案いく、対象の決定やスケジュールの調整、広報の進行など、様々なことに目を向けなければならぬことなど、実際に自分たちで動いてみないと気づかないことがたくさんあった。チームで全体目標を共有すること、物事を俯瞰的に見る力、それらが自分たちに足りていないことを実感した。そして、期日に対しての認識の甘さを思い知ったことも研修では大きかった。学生がレポートを期日ぎりぎりを出して間にあわせることとはわけが違う。

例えば、チラシ作りの際も、印刷会社に入稿してから出来るまでに時間がかかることや、役所に関係する書類にかかる時間など、自分たちだけの時間だけではなく、様々な人が関わる時間があることを考えなければならぬことも初めて知り、社会の厳しさを身にしみて感じた。いかに自分たちが全体を見ずに狭い範囲に集中して周りが見えていなかったかも知った。けれど、自分やチームに何が足りていないのが、失敗をして冷や汗をかけたことで身にしみてわかったことも良い経験になったと今では感じている。

この研修では、普通の学生が体験できないようなことをたくさん体験することができ、とても濃い日々を過ごすことができたし、吸収しきれないほどたくさんのことを学んだ。学んだと同時に、ワークショップという芸術や表現に身近に触れることができるワークショップの素晴らしさを知ることができた。しかし、実際には、その素晴らしさは世間ではまだ多くの人には知られていないように感じる。芸術を身近に体験できるように環境がもっと増えて周知されれば、心の豊かな人が増えるのではないだろうか。またこの研修では実際に体験することの重要さに気づき、必要性を感じた。芸術系の大学以外の大学にも、もっと芸術を身近に体験できる機会が多くあれば理想的だと研修を通して感じた。

(ひろせまき／神田外語大学
外国語学部英米語学科四年在学中)

あうるすぽっとアートマネジメント研修生レポート3

公共劇場とワークショップ

小堀 結香

この研修は自身にとって、今後どのように生きていくかを考えるきっかけになったと思います。まだ研修を終えていない現在、九ヶ月にわたる研修全体を俯瞰的に捉えることはできません。しかし、普段接することのなかった様々な場に身を置き、責任のある役割を任せられるという経験の中で、新たな視点を持ち得たと感じています。

研修開始当初、劇場と聞いて連想するのは、「見に行くところ」、「発表するところ」程度でした。職場としての劇場について何も知らず、社会のマナーもルールも知らずにここへ飛び込んだことは、今にして思えば冒険でした。突然、任される一職員の方々はそれぞれ仕事を抱えているので、機会を誤ると、すぐに答えをもらえない。よく考えてから相談しなければならぬ。しかし、締切は決まっている。といった、つねに臨機応変な対応が求められる状況に、はじめはなかなか慣れず苦労しました。未だに対応し切れていない部分が多々ありますが、職員の方々のフォローの下、日々勉強しています。

我々インターン生が関わらせて頂いた事業は、多岐にわたります。ワークショップ事業としては、「にゅー盆踊り」「ダンバリ」としまっぷ計画「日本語の学校」「舞台監督の仕事」、劇場での公演の関連ワークショップなど。広報として区内を練り歩いているチラシ揭示や、簡易

チラシの作成、応募者の方々への返信作業などを行い、当日にはスタッフとして参加しました。あうるすぽっとの自主公演における受付業務や、併設の豊島区立中央図書館で行われる企画展示の担当もさせていただきました。また個人的に相談にに応じていただき、劇場の技術スタッフの方々に仕事現場を見せて頂くことができたのも非常に大きな経験でした。

ワークショップ事業のなかでも印象深いのは、十一月の「テクノロジーと演劇」です。イギリスからポール・サットン氏を講師として招聘し、氏が演劇とICTを融合させて行う青少年対象のメディア・リテラシー教育について、二日間にわたるシンポジウムとワークショップを行いました。企画段階からほぼすべて、講師のホテルの手配・ワークショップの内容と日程決め・チラシ作り、もちろん英語で連絡を取りあうことも、インターン生の主導で進めるというプログラムでした。それまでの研修の成果を問われるような、そして臨機応変な情報収集が不可欠な内容でしたが、中山先生や事務所の方々、立教高校の皆さんに協力していただき、やっこのことで開催に至りました。参加者の方々が興味を持ち、満足していた様子だったことに安堵を覚えつつ、反省点が多々ありました。インターン生どうし、お互いの甘えが露呈した場であったと感じます。しかし、同時に、三者三様に一つの壁に挑むこ

とで、最もチームワークを発揮できた場でもあったと思
います。

準備に、事後処理と、日程的に重複する事業を日々進
めていくなかで、特に広報の面では「どんな人に興味を
持ってもらえるか」「どこにどのよう情報をお届けするべ
きか」、そして、「全体としてやらなければならないこと
は何で、今どこまで終わっているのか、優先順位はどう
か」を明確にする重要性を考えさせられました。特に、
複数のことを同時進行していく上では、インターン生
内、事務所内での情報共有の徹底が、とにかく大切であ
ることを実感しました。

研修のなかで、未だ疑問に残っているのは、「公共劇
場とは何か」ということです。あうるすぽっとに身を置
いて半年、この施設は会議室の貸し出し事業に重きを置
いているのではと感じたり、劇場ホワイエを開放しなけ
ればならないために、上演準備が妨げられることもある
のではと感じることがありました。区民が広く利用して
こそこの公共施設であり、開かれた場所であるべきこと
はもちろんだと思います。一方で、公共「劇場」である以
上、舞台芸術そのものへの理解・望ましい態度を身につ
けてもらえるような努力を広く発信していくべきでも
あると思うのです。あうるすぽっとは開館からまだ二
年半に満たないこともあり、まず足を運んでもらうこと
がその第一歩なのかもしれません。しかし、舞台芸術の
発信地であろうとすることと、区民の交流センターであ
ろうとするこの両立の難しさを感じました。

一見解ですが、ワークショップ事業が、その両立の橋
渡しをする役割があるのではないかと考えています。

「講師、またはそのテーマと参加者とのつながりの
場」、「参加者と参加者、またはその興味と興味とのつな
がりの場」を提供することができるとは思います。初対面だ
った参加者どうしが意気投合して帰っていく様子や、他
のワークショップに参加していた者どうしが別の企画
で再会し、話に花を咲かせていた様子が印象的でした。
舞台芸術にまつわる（という）ことが、どの程度認識され
ているかわかりませんが）ワークショップへの参加を通
して「この劇場でつながった」感覚が生まれるのかも知
れないと思いました。

やってみなければわからない！と、すぐ立ち止まって
しまう三人に示唆を与えてくださった中山夏織先生。相
談に応じ、サポートしつつ、色々な業務を任せてくださ
った職員の皆様。本当にありがとうございました。同期
のインターン生、みんなと知り合えたことも大きな財産
です。そしてワークショップで出会ったすべての人たち
に感謝しております。研修で得られたたくさんの方々の
自分の糧にしていきたいと思えます。

（こぼりゆか／お茶の水大学
芸術・表現行動学科舞踊教育学コース四年在学中



研修生企画による「テクノロジーと演劇」ワークショップの光景。



C & T芸術監督ポール・サットン氏とアシスタントのマックス・アルソップ氏と
ともに（写真左から、吉田、小堀、サットン、アルソップ、廣瀬）。

「生きる力」再考—シティズンシップと公共性

中山 夏織

ドラマ教育に携わってきて十年以上の時間が経過したが、このところ自分自身強く反省するのは、「生きる力」という言葉をどうも安易に使ってきたのではないかと意識することだ。コミュニケーションや表現という言葉でドラマ教育の目的として使うことだけは、その曖昧さゆえに、また「ハウツー」の取得のように考えられてしまっているのではないかと危惧から、厳しく自戒してきたが、「生きる力」という言葉も実に曖昧で実態がない。わかったつもりになってしまふ、させてしまふ、かなり怪しい言葉ではないだろうか。

そもそも、「生きる力」を持った人というのは、どういう資質を持った人なのだろうか？ たくましさなのか、しなやかさなのか、柔軟性なのか。意思決定ができ、問題が解決できることなのか。善良であり、感受性が高く、洞察力があるということなのか。だが、何が違って、何が欠けているような気がする。というのは、多重知能を提唱したハワード・ガードナーが指摘するように、「生命の不思議な特徴は、私たちに人間が互いに異なる」からだ。人によって、「生きる力」も異なるのは当然なのではないか。

「生きる力」は、ハワード・ガードナーの「多重知能」同様、多面的なものなのだと思う。このように綴ると、またこれでわかったつもりになってしまう、させてしまう危険性をはらんでしまうので気をつけなくてはならないのだが、上記の資質の羅列はたしかに「生

きる力」のある面を描いているものの、教育というフレームワークのなかで考えるとき肝要なのは、自己の持つ能力が何たるかを見いだし、発展させながら、その「使途」が探ることなのではないかと考えるようになった。

善良であること、感受性豊かであること

若い世代と接しているとその無垢なまでの「善良性」に戸惑う。善良であることがスキルだと私は思えないのだが、それを「良し」とする風潮があるためか、ときには善良性を演じているのでは？と思われることもある。だが、素直でまじめという善良性に立ち止まっていけないだろうか。

善良であることと、倫理感がある、あるいは徳性があるということとのあいだにはたしかな差異がある。善良であっても、他者を思いやることはできても、考えるスキルや、行動するスキルがなければ、「生きる力」とは言いえないのではないのか。「善良なるいい子」を求めてしまふのは、市民や従業員に従順さを求める独裁的なリーダーや為政者の側の発想のように思えてならない。

また、若い世代だけではないのだが、自分は感受性豊かで、感情に敏感であることを強調する人たちに会ったことがある。それを才能として、好意的に受けとめる層もある。「うちの子は感受性豊かなので」というわけである。ダニエル・ゴールドマンの提唱した「感情的知能(EQ)」が、少しばかり誤解を伴って、これに拍車をかけた。

だが、芸術家に多いかもしれないが、傷つきやすいことを天下の宝刀のように掲げてみたり、あるいは武器にして、かなり乱暴に切り返している光景をしばしば目にすると、「感受性が強い」ということと、ゴールドマンの求めるEQに伴うはずの「自制」と「共感能力」とは、まったく異質なものと云わざるを得なくなる。感受性の強さを強調する人にしては「自制」の欠如を見るのは私だけではないだろう。ガードナーが指摘するように、「感情に敏感なことと、「善い」あるいは「道徳的な」人であることとは、厳密に区別すべき」なのである。

さらに、ガードナーは「EQが高い」ということは、そのスキルを社会的に望ましい目的のために使うことを意味しない」とゴールドマンを辛辣に攻撃しているが、これはたしかにこれまでの歴史が立証してきた事実であるだろう。ゴールドマンの本意を誤解しているようではあるが、たしかに、望ましい目的、つまり、「使途」への行動の不在は否めない。

「使途」は、その人の「倫理感」や「徳性」によって左右される。もちろん、倫理感や徳性だけが左右する要素ではない。スタニスラフスキの言うように、「与えられた状況(given circumstances)」の影響は多大なものがある—そこにコンフリクトが生まれ、ドラマが誕生する。だが、倫理感や徳性なしには、能力は攻撃のための武器に転じやすい。

道徳じゃない、シティズンシップ

「倫理感」や「徳性」は教えられうるスキルなのかと考えると再び戸惑う。しかも、倫理も徳性も、その社会によって、コミュニケーションによって異なるだろう。

だが、一つたしかに言えることは、これらを単純に道徳教育と結びつけてはならないことだ（道徳教育という、つい引けてしまうのは、過剰な管理教育のなかで高等学校までを過ごしたせいだと思う）。ここで私が問いたい「倫理感」や「徳性」というのは、「道徳」ではなく、「シティズンシップ」や「公共性」という言葉に内包されるものである。もちろん、ここでシティズンシップが指し示すのは、単なる要求だけの「市民権」ではない。参加し、行動する「市民性」である。

善良なだけでは、感受性が豊かなだけでは十分ではないというのは、「シティズン」としての自覚や責任、そして行動の必要性、価値を見えなくしてしまうからである。善良であることは過剰なまでのお人好しだということかもしれない、感受性豊かというのは過剰なまでに自己中心であることかもしれない。現代社会において、これらも大切な能力なのかもしれないが、自己の持つ能力の「使途」が狭く限定されてしまう。教育のコンテキストが見つめていかななくてはならないのは、一人一人の持つ能力とは何であり、それをどう発展させるのかだけではなく、その使途、さらには、その使途に公共的な広がりを持たせていくことなのではないか。もちろん、公共的な役割が「滅私奉公」のような為政者の好む便利な道徳であってはならない。むしろ、チャールズ・ハンディの語る「適正な自己中心性」に則ったものであり、山脇直司の追及する「活私開公」を志向するものでなくてはならないはずである。

シティズンになるための練習

ドラマ教育の特性は—あくまでも個人の演技技術などの取得・向上に特化したものではないという前提を以て—

ガードナーや創造性教育の提唱者ケン・ロビンソンが語る一人一人の創造性のありかを探るメディアになる。さらには、「使途」のめざすものとしてのシティズンシップや公共性を、単なる「きれいごと」におさめて教条的に教え込むのではなく、多面的に重層的に体験的に学びうるということにある。環境問題などに対して、固定された「きれいごと」的正しい答えを教条的に教え込まれた子どもたちの不自由さはときに痛々しくも見える。人間の生活にはきれいごとではおさまらない「コンフリクト」がつきまとうからだ。それはときに辛い選択を強いるものにもなる。親や教師がしばしば「心優しく」子どもたちがコンフリクトと出会わないように配慮し、排除してあげているのを見るにつけ、まさに「生きる力を養う機会を奪わないでやってほしい」と懇願もしたくなることもある。ドラマ教育は、あくまでも自分ではないという安全な距離を保ちながら、コンフリクトの本質と出会い、その処理を多面的に体験するメディアである。だから「生きる練習」とも表現されることが少なくない。問題と出会い、集団としてベターな妥協をもって解決することをシュミレーションしていく。社会に出ていくための「プリパレーション（準備）」というわけである。

Prepare to work, to jump, to stand for, to be a citizen
： 様々な準備を提供する。

失敗することを過度に恐れる社会環境のもとでは、失敗する練習をしておくことは実はとても大切な意味をもってくる。失敗したくないために、行動する前についての誤用を注意してしまう。ほんとうに失敗していけないのなら、失敗を経験しておく必要があるというのはレトリックのようだが、この本質なのだと思う。もちろん、与えられた状況が厳しければ厳しいほど、失敗以上に、成功する経験はより重要なものになる。一つの正しい答

えというものの存在しない、また役割を分担しながら集団としての成果を問うドラマ教育の醍醐味だが、集団として問題を解決し、やり遂げた、集団に貢献しえたという成功体験は、子どもたちに自分だけが成功するという以上に、充実感と自信をもたらす、自己の能力の公共的使途へと向かわせるきっかけにもなるだろう。

その意味で、集団であることよりも自己を重視し、自己の内面や過去を探るような「メソッド演技」や「セラピー」は、ドラマ教育とは一線を画すると思えなくてはならない。必要なのは、感じるのではなく、社会的に望ましい目的をもった行動へと導く体験を認識することなのである。

いま日本社会に溢れるのは、自分と自分の周辺の限られた領域の、利益を守ることで汲々している小市民性である。善良で悪意はない。だが、問題でも、課題でも、試験でも、仕事であつても、その場その場をちやちなズルサをもって責任回避し、すり抜けようとしてしまう。つねに被害者を振る舞う。助けてもらうのが当然だと要求を振りかざす。若い世代は、大人の社会のありようをみて学習をしていく。そこに民主社会も市民社会も存在しえない。少なくとも、「生きる力」というものは、ちやちなズルサで自分を安っぽく扱うところからは生まれないように思う。だからこそ、大人社会の責任を棚上げにしてはならないのだと感じるわけだが、同時に、その大人社会を批判し、建設的に変革していく「使途」を若い世代には自分たちのものとして見いだしてほしいと切に願うものである。

（なかやまかおり／プロデューサー

ドラマ教育アドヴァイザー）

青少年の未来とアートマネジメント 「学校と芸術をつなぐ実践ストラテジー」報告書

劇場を地域のクリエイティブ・ラーニングセンターとして、またリスクにさらされた青少年と職業訓練の場に変身させる現在進行形の大プロジェクトを紹介。

2009年8月、ロンドンの有名非営利劇場リック・ハマスミスからアダム・コールマン氏をお迎えして開催されたアートマネジメント・セミナーの記録を中心に、青少年の未来のために劇場が果たしうる役割を紹介。

「青少年の未来とアートマネジメント」

(2009年12月25日発行)

編集・発行 シアタープランニングネットワーク

A5判 68頁 頒布価格 800円 (送料込、但しメール便)

頒布ご希望の方は、部数をご記入の上、ご送金くださいませ。

郵便振替口座 00190-0-191663

加入者名 シアタープランニングネットワーク

特定非営利活動法人 シアタープランニングネットワーク (TPN)

国際化時代の多様な文化という視点に立ち、舞台芸術関連の様々な職業のためのセミナーやワークショップをはじめ、調査研究、情報サービス、コンサルティングなど、舞台芸術にかかるインフラストラクチャー確立をめざすヒューマン・ネットワークです。国際的な視野から、舞台芸術と社会との関係性の強化、舞台芸術関連職業のトレーニングの理念構築とその具現化、文化政策・アートマネジメントにかかる情報の共有化、そしてメインストリームシアターとコミュニティシアターの相互リンケージを目的としています。2000年12月6日、東京都よりNPO法人として認証され、12月11日、正式に設立されました。

theatre & policy シアター&ポリシー

TPNの基幹事業として、2000年6月から定期発行(隔月間・年6回)されています。定期購読をご希望の方は、TPNの準会員としてご参加下さい。年会費3千円(送料込)を下記までご送金下さい。尚、送金の際は、ご住所・氏名・電話番号を忘れずにご記入くださいますようお願い申し上げます。

郵便振替口座 00190-0-191663

加入者名 シアタープランニングネットワーク

編集後記

思い立って台北を旅しました。隣国でありながら、また留学中には多くの台湾からのクラスメートと出会いながら、これまで自分が台北を旅する感覚をもっていませんでした。私が英国に留学した90年代、台湾の学生たちにとってアートマネジメントは(留学する目的として)4番目に人気のあるサブジェクトだという話を聞いたことがあります。その成果なのかもしれませんが、台北の文化施設の充実に驚かされました。立派な建物は「ナショナリズム」に起因するものなのでしょうが、それ以上に明確なポリシー、意思というものを強く感じさせられました。その意思をたしかに感じながら、「格差社会」のことを考えました。英国も多分にそうなのですが、台湾の近現代史は残酷なまでに、格差社会の歴史でもあります。芸術文化をめぐる意思はこの格差社会をどのようにとらえているのだろうか…。

「創造都市(クリエイティブ・シティ)」を志向する自治体が増える中で、芸術文化が単なる経済的価値を誘発するファッショナブルでお手軽な道具として機能することだけが求められていると感ずることがあります。「クリエイティブ・クラス」の台頭が語られるものの、新たな特権階級として特権を享受するだけに終わるのではないか。結果として、格差社会はさらに拡大してしまうのではないか。戦後の文化政策は格差を是正する理想主義に燃えていたのに、いま志向されているのは新たな格差の「創造」ではないのか。

英国の地域劇場に働く演劇人たちがしばしば口にしてきたのは、自治体や文化政策が経済やファッショナブルな側面しか見ないのであれば、その格差を埋める使命は演劇人の側にある。クリエイティブ・クラスが新時代のエリートであるのなら、エリートにふさわしい倫理観と正義感をもって、資源を広い層に分ち合えるように仕掛けていくのだということです。

短い滞在で台北の本質がわかったわけではありません。まだ実は、出会ってもいない。出会うための準備ができたただけなのだと感じています。それが新しい旅のはじまりにつながるのだと感じています。(中山夏織)

特定非営利活動法人
シアタープランニングネットワーク
編集人 中山夏織
発行人 高山敦司

〒182-0003
東京都調布市若葉町1-33-43-202
TEL (03) 5384-8715
FAX (03) 5384-8715
tpn1@msb.biglobe.ne.jp
<http://www5a.biglobe.ne.jp/~tpn>

助成  日本財団
The Nippon Foundation